

子どもの玩具環境を考える

——歴史的観点から——

渋谷 寿

現代は、経済と新技術の論理に基づき大量生産されるプラスチック玩具・電子技術を導入した玩具等が主流になり、子どもの本来的遊びの世界をも根底から覆そうという勢いである。

しかし、一方ではボール・コマ・けん玉・凧・ひもで引く動物や人形といった玩具も確実に子どもの遊びの中



に存在してきた。このボール・コマ・ひもで引く動物や人形といった玩具は、古代エジプトにおいて既に子どもたちに玩具として与えられていたものである。つまり、

現代のボール・コマ等と古代エジプトのそれらとは基本的に全く変わっていないと言える。また、これらの玩具は、古代エジプト以外に、時代・場所・人権等を越

え、普遍的に全世界に存在していた。この普遍性は子どもと玩具の本質的な関係のあり方を数千年の歴史を通して明らかにしているのである。

ところが、近代のプラスチック玩具やファミリーコンピュータのような玩具の登場により、子ども本来の遊びと玩具の関係が、大きく変貌しようとしている。そこで、玩具と人間とのかわりを歴史を通して概観し、人間と玩具のかかわり方について考えてみたい。

玩具の歴史が語るもの

ヴァルター・ベンヤミンは、太古に存在していたボール・輪・羽根車・凧といった玩具が、当初は宗教的色彩を帯びたものであって、大人にとって無意味であったからこそ、ほんものの玩具になりえたと語っている。^(注) また、赤ん坊に初めて渡されるガラガラも当初は悪魔払いの意味を含んでおり、大人が子どもの玩具として意識して作ったものではなかった。これらは時代とともに子どもの手に渡り、しだいに普遍的な玩具に広がっていった

わけであるが、これらは、玩具とは無関係な精神性と遊びへの欲求にその起源があったのである。この意味で、大人の玩具への介入はなかったと言える。

しかし、文明の進歩とともに、玩具が一つの産業になり、工業時代に入ると、玩具は子どもの本来的欲求から離れた高度なものに変わり、それは、現代の量産される玩具にまで続いている。

玩具の発達とともに、古来玩具に備わっていた自然・神・宗教性は顧みられず、自然科学がそれに変わって台頭してくる。そして、子どもをターゲットとして続々開発される商品としての玩具の他に、近代になり人間の成長に及ぼす影響を考慮に入れた玩具が出現してくるのである。

この玩具の歴史はごく新しく、フレーベルの恩物が最初であると言われている。フレーベルは森羅万象の裏にある数量的・幾何学的な自然界の法則性を内在した玩具として恩物を位置づけた。また、モンテッソーリは自然科学的な視点に立って、感覚から観念へ発展させる教材

として数量的に秩序だった多くの教材を生み出した。その後、こういった教材機能をともなった単純なフォルムの玩具が数多く世に生み出されていくことになる。

このように、現代の教育的に考えられた玩具の主流は自然科学的・発達心理学的に発展・展開していくのである。

こういった考え方に対して、ルドルフ・シュタイナーは全く異なった視点で子どもの成長をとらえ、玩具の重要性を提示した。彼は精神科学的な人間観に基づいた、人間の成長にとって必要な玩具のあり方を明らかにしている。シュタイナー教育におけるその玩具は布を結んだ人形であり、自然素材による手作りの玩具である。人間に関するあらゆる問題を科学的に解決できうると信じていた人々の前に、人間の心・精神・魂・霊性をも含めて人間の成長をとらえる精神科学的観点に立った玩具の見方が生まれてきたのである。

また、シュタイナーのほぼ同時期に、桜沢如一という日本人が、ヨーロッパにおいて古代中国の易的宇宙観

を基盤にした食養論を展開し、東洋の精神性が西洋において受け入れられつつあった。

この食養論は、現代の自然食運動の中では最も重鎮の位置づけがされているとも言われているが、食の問題だけにとどまらず一つの人生哲学に高められた。そして、子どもの教育の問題にも言及されており、玩具は子どもの意志教育においては不要であるという東洋的教育観を提示しているのである。

以上、玩具と、玩具の考え方の歴史を概観したわけであるが、物があふれ、お金を出せばあらゆる玩具を買うことのできる物質文明とも言える現代において、それへの強烈なアンチテーゼとも言えるシュタイナー教育の玩具や、桜沢如一の「玩具は不用」と言い切る姿勢を考察することは意義がある。このような思考は、現代においては主流ではない位置づけがされるであろうが、その奥にある考え方を採って現代の玩具と子どもの本質的関係を考える手だてにしてみよう。

桜沢如一の考え方と玩具

桜沢如一（一八九三—一九六六）は、古代中国における伏羲の易に源を発する陰陽論を柱に、宇宙の秩序に即した人間の生活のあり方を明らかにし、あらゆる領域においてその具体的実践方法を提示している。この考え方はマクロビオティックと称され食養を中心として展開されたが、日本では一部を除きほとんど理解されず、欧米で根づき広く普及した。

彼はこの陰陽論で何を目ざしたか。それは人々に、自然に則した幸福な人生の設計方法を教えることであり、人間同士・国家間の平和な思想を築くことにある。彼はこの視点に立って子どもの教育・育児についても言及している。彼の著書である『食養生読本』から具体的な記述^{〔注2〕}を考察してみよう。

「オモチャ——なるべく少ない方がよろしい。オモチャはなくともよろしい。ない方がよろしい。（中略）大人が自分と同様に思つて美しいオモチャを買つてくるのは、おかしいものです。オシャブリは、悪いクセをつけま

す。セルロイドの玩具は、火がついて一生、跡のこの大ヤケドをしたりします。」ここでは赤ん坊、幼児にとつての玩具は否定されている。

ここで述べられている美しいオモチャとはどのようなものか定かではないが、この文章が書かれた昭和初期はセルロイドのキューピー人形等が全盛の時期であり国産玩具の黄金期をむかえつつあったことを考慮すれば、量産される、セルロイドを主に用いた幼児用の玩具と考えてよいだろう。

桜沢はセルロイドの危険性まで付け加え、このような玩具の否定を強化しているのである。

次に、桜沢がフランスで見聞した女兒の遊びのようすが記されている。「おもちゃは、ごく少ないのですが、その一つにポロ切れがあります。それを姉の方のポレットがもつて遊んでいます。それは、お人形の外套にもなりますし、おもちゃの風呂敷にもなりますし、女中が来てお掃除を始めると、室々の床を拭く雑巾にもなります。」ここでは、与えられた非常につましやかな状況に

おいて、子どもの豊かな遊びを生み出している様子が語られてゐる。

桜沢はさらに、遊びについて次のように述べてゐる、

「遊ばせないのはかわいそうだ、というのは盲目的な母親の愛です。それよりも、小さいながらも責任のある仕事を常にやらせることは、なによりもいいことです。それは、忍耐力と注意力と、長時間にわたる耐久力を、しらすしらすの間に養います。」ここでは遊びそのものも否定する姿勢が語られてゐる。

桜沢が考える、子どもにとって必要な環境とは、「三分の飢じさと、三分の寒さ」であり、玩具の存在は、親の甘やかしの姿勢につながっているのである。遊びとしてはめぐまれない状況においても、不平・不満を言わず、ポロ布一枚で豊かに遊びを創造できる子どもが彼の理想とする子ども像の中にあるのだろう。子どもには簡素な自然なものを与えよという彼の考え方は、物質としての子どもの玩具を否定し、遊びそのものの必要性も自然から無に向かわせるのである。

ここで柳田国男が語る古来の日本の子どもの遊びの三つ(註³)の姿を思ひうかべることができよう。その一つは「子どもの自製」の姿である。豊かな自然の中で子どもは草の実やどんぐりを用いた自然素材遊びを充分楽しむことができた。二つめは親の目を盗んで、物さし、へら、鋏、針等を持ち出して遊ぶ「弄もよほび」の姿である。三つめは神社詣りの御宮筒に起源のある「買うて与える玩具」に遊ぶ子どもの姿である。

現代はこの「買うて与える玩具」が主流であるが、かつては大人の、子どもの玩具に対するかわりは非常に少なかったのである。桜沢が玩具は必要ないと語っているのも、その背影には、精神的に豊かな遊び状況が存続していたことを見落としてはならないであろう。彼が否定するのは現代の「買うて与える玩具」である。

では「子どもの自製」あるいは大人の手作りの玩具についてマクロビオティックの考え方からどのような指針を得ることができよう。

桜沢は人間と環境との関係における「身土不二」の原

則について語っている。「身土不二とは、『人間が最も広い意味の環境の産物である』事を意味する言葉である。その土地、その季候、その産物の子たる人間は、その土地、その気候、その産物に適應する時その生を全うし、それに反逆する時悩み亡ぶといふのである。^(注4)」

子どもは環境要因すべてを吸収して成長する。「玩具も環境の一要因である。この玩具が「身土不二の原則」において作られているもの、すなわち、身近かな生活環境から入手できる自然素材を用いた手作りであるならば、幼児は感覚的印象という食物を最も自然な形で吸収できるのである。幼児が見て、触れて、想像するものには、この身土不二の手作りの原則は大きな意味を持つと考えられる。

食物ほど生理的に直接影響することはないという主張に対しては、「幼児は全身感覺器である」というシュタイナーの言葉を考慮すれば、その重要性は理解されるのではないだろうか。

マクロビオティックとシュタイナー教育の環境

桜沢は晩年、シュタイナーの人智学に出会っている。

そして彼はシュタイナーの精神科学的な考え方との同一性を感じていた。しかし、これは物質主義的科学に対する精神科学という意味においての共通性であり、精神科学における東洋と西洋の方法論の違いは存在していた。

この相違は子どもの教育観にも表われており、玩具の考え方の中にもそれを見い出すことができる。

桜沢のマクロビオティック的観点からみた玩具については既に述べたように限りなく自然、無に近づいていく。一方、シュタイナー教育の観点では玩具は肯定される。

シュタイナーは玩具について重要な発言をしている。

「子供にお人形を与える時に、私達は一枚の古ナプキンを巻き、ナプキンの両端で足を、他の両端で腕をこしらえ、結んで首を作り、更にインキで眼、鼻、口を画くと一つの人形ができる。(中略)子供がナプキンで作った人形を目の前にしたら、それを人間として見なすために

必要なものを自分の想像の中から引き出して補わなければならぬ。この想像力の働きは、脳の形体を作り上げる営みに形成的に参与する。(中略) 生命のない数学的な形体からできているにすぎない玩具は、すべての子供の形成力に対して荒廢的で抑圧的に作用する。それに反して生命のあるものを思い浮かばせるようなものはすべて、正常な作用をする。^(注5)

ここでは子どもの成長にとり、空想力を刺激し、生き生きとした有機的イメージを与える人形の重要性が語られている。ここで注意しておきたいことは、桜沢が語ったポロ布で遊ぶ女兒の姿と、シュタイナーの言う人形で遊ぶ子どもの姿は、ほとんど同一の子どもの本来の姿を示していることである。シュタイナー教育では、子どもに必要な人形の玩具像を有機的イメージという視点により意識化し、大人が物として介入してもよい限界を示すと共に、愛情を子どもに表わす方法を教えている。桜沢が考える子どもへの愛は、物質的に質素な状況を与えることであり、それがポロ布で豊かに遊ぶ子どもの姿を生

み出している。このように両者は、大人のかかわり方に違いはあるものの、子どもの遊びは、ほとんど同じ状況が求められているのである。

シュタイナー教育において子どもに勧められている玩具は、庭遊び用の玩具の他に「自然素材そのもの」である、まつかさ・石・貝がら、羊毛・木の皮・トチの実等と「手作りの玩具」である、木の枝の輪切りの積み木・小さなテーブルと椅子・簡単な木製の台・布製の小さな人形・小さな布・木製の人や動物等である。

これだけの玩具で七歳までの子どもの本質的遊びの要求である、模倣と繰り返しに答えることができるのである。

環境と人間の関係における「身土不二の原則」については先に述べたが、シュタイナー教育における「自然素材そのものの玩具」と「自然素材を加工した玩具」は、この「身土不二」の観点に適合している点に注目しておきたい。シュタイナー幼稚園で用いられる木の玩具は、近郊で切られた木を幼稚園で自然に乾かし、愛情を込め

て削り出される。積み木は、皮まで残した木の枝の輪切りであり、東洋でいう素材の全体的調和を示す「一物全体」に近い使い方がなされる。また、まつかさ等自然素材そのものの玩具は、幼稚園周辺の自然の産物である。

シュタイナー教育の玩具は精神科学的見方において創り出されているが、この東洋の見方において、大きな意味で「玩具の身土不二」が成立していることは興味深いことである。

一つの方向

以上、桜沢如一の考え方と、シュタイナー教育における玩具について述べたが、これらの考え方は、時代、文化的背景等が異なる現代の日本の子どもに、そのまま当てはめることは無理があるかもしれない。そこで、玩具の歴史の全体像を通して、それらの位置づけを考えてみよう。

現代は、今までに述べてきた太古の玩具・自然素材の玩具・数量概念を基にした玩具・プラスチック玩具・シ

ュタイナー教育の玩具、さらには桜沢如一の「玩具は不用」という考え方が混沌として存在していると言えるであろう。

つまり、現代に存在するあらゆる玩具の考え方と玩具は、玩具の歴史を語っているという見方ができるのではないだろうか。

現代の子どもは草花でも遊び得るし、プラスチック玩具でも遊び得る。もちろん現代は後者の志向が主流になり、それは時代の流れの上で否定はできないことではあるが、あえて、この玩具の歴史的全体像における調和ある姿はどこにあるかを探してみよう。

それは、精神性と物質性がバランスのとれた姿であろう。大古からの精神文化と、人間が用いるものを作る技術が調和する為には、行き過ぎた高度な技術は必要としない。子どもが、この物心両面を吸収し成長する上にも、この技術の優先しないもの、作りの姿勢が要求されるであろう。

木の玩具の生産量は年々減少傾向にあるが、こういっ

た木を用いた小規模生産の形にこそ、作り手からみた調和のとれた姿の一つがあるのである。

また、子どものかわりという視点でみると、大人の介入が少ない玩具ほど、子どもに空想力・手の活動・技術の修得・人と人との交わり等を自分で生み出させる傾向が大きいことに気がつく。

大人は教育という形の介入で子どもの遊びの本分を侵してはならないだろう。大人は玩具に対して、節度あるわずかの介入が許されるだけではないだろうか。それは、それぞれの玩具を作る立場内で、できるだけ、素材を自然なものに、技術を一步プリミティブに、そして、子どもの前にある大人の生き様を一步精神的に、自然に目を向けることではないだろうか。これは、物質文明における調和を求める一つの方向であると言えよう。

次の機会には、以上の考え方による具体的な玩具の姿について触れてみたいと考える。

(名古屋女子大学)

注1) ヴァルター・ベンヤミン、丘澤静也訳「教育としての遊び」晶文社

注2) 桜沢如一「食養人生読本」日本C I協会

注3) 柳田国男「子ども風土記」角川書店

注4) 桜沢如一「無双原理・易」日本C I協会

注5) ルドルフ・シュタイナー、大西そよ子訳「精神科学の

立場からみた子供の教育」人智学出版社

注6) フライア・ヤフケ、高橋弘子訳「シュタイナー教育の手づくりおもちゃ」イザラ書房